

平成 28 年 4 月 14 日

学修支援センター長 殿

学部長 宮内 靖彦

平成 27 年度 学部学修支援事業報告書

標記のことに、以下のとおり報告いたします。

学 部 名	法学部
事 業 名	フェロー(専門型 TA)を用いた法学部学生に対する個別的学修支援
平成 27 年度実務担当者名	藤嶋 亮 (法学部法律学科/准教授)
事 業 の 概 要	
【計画性】当初計画通りに事業を推進できたか？ (いずれかにチェック☑)	
■計画通りであった □概ね計画通りであった □あまり計画通りではなかった □計画通りではなかった	
(以下、 本年度の推進事業の概要 について、年初「申請書」の「内容」「目的」「計画」、及び前記【計画性】の自己評価、さらに別添の「経費執行表」における予算の執行結果に照らして記入してください。)	
<p>平成 27 年度の本事業においては、学修支援スタッフである専門型 TA(フェロー)を雇用し、フェローを通じた学修支援を実施した。授業期間中および期末試験期間中には 4 名のフェローが 0510 演習室に毎日常駐し、教員の指示に基づいて、講義中に行われた小テストやレポートの採点・添削等の講義補助を行うと共に、学生の質問や要望に応じて、個別に指導を実施した。</p> <p>フェローの勤務状況は予定通りであり、予算の執行結果についても特段に問題はなかったと思料する。また、期末試験前には、来談者数が増加することが予想されたことから、1 日 2 名の勤務体制をとったところ、学生を待機させることなくスムーズに指導を行うことができた。</p> <p>また、フェローの勤務場所である 0510 演習室についても、必要な機材 (パソコンやプリンター・机・椅子等) を導入すると共に、学修指導に必要な基本書・教科書等も用意しており、指導環境についても十分な水準に達していると考えます。</p>	

成 果 と 展 望

【達成度】年初計画で設定した目標は達成できたか？（または「今後達成できるか？」）（いずれかにチェック☑）

十分達成できた（できる） 若干の計画修正の上達成可 大幅な修正の上達成可 達成できない

事業推進によって得られた成果

（以下、**本年度の事業推進によって得られた成果**について、年初「申請書」の「期待される効果・達成目標」、及び上記【達成度】の自己評価に照らして記入してください。）

フェローによる指導等やレポートの添削等により、学習効果が上がったと推測されるが、特に大規模講義におけるフェロー制度の効果を測定できていないことが問題である（フェロー制度を利用した講義において、単位取得率の向上や時間外学習時間の増加等のデータが得られたわけではないため）。

他方でフェローによる個別指導については、別紙の「2015年度フェロー利用実績表」にまとめてあるが、アンケート提出者の平均相談時間は40分強、満足度（感想の「①大変良い指導であった」を選んだ者の割合）は90%近くに達しているなど、極めて良好な結果が出ていることがわかる。

もっとも、平成27年度の後期には来談者が低迷するなど、フェローの利用状況が必ずしも芳しくなかったという問題もある。教員による宣伝等を継続的に行うべきであったと反省している。その原因としては、あくまで推測ではあるものの、①後期よりフェロー室の場所が変更（1513研究室から0510演習室）になったために、場所が分かりにくくなったこと、②カリキュラムの編成上、後期にフェローを利用する教員が少なかったことが考えられる。

概していうと、フェローの個別指導は学生にとって若干「敷居が高い」ようであるが、いったんフェローの指導を受けると、その有効性に気付いてリピーターとなる者が少なくないようである。今後は、フェロー室（0510演習室）をより気軽に訪ねることができるような環境づくりにより一層取り組まなければならないと考える。

得られた成果の今後の活用策

（以下、前記「本年度の事業推進によって得られた成果」を踏まえ、授業等への具体的な反映方法等、**今後の活用策や展望**について具体的に記入してください。）

フェロー制度も平成28年度で3年目を迎え、認知度も上がり、その有効性もわかってきたことから、まずは学生に対してフェロー制度の有効性を伝えると共に、法学部教員に対しても、フェロー制度の活用可能性について積極的に知らせる必要があると考える。具体的には、フェローの活用手法について幾つかモデルを示したり、特に大人数の講義を担当する先生方に対して利用を促したりすることが考えられる。

特に平成27年度は、民法総則に関する1年生からの質問が多かったことから、平成28年度においては、民法を履修していて学修に躓いている学生たちを対象として、より重点的な広報を行い、単位取得率の向上等を図っていきたいと考えている。

また、従来のフェローは、教員からの個別の要請を受けて行動するという言わば「受身」の姿勢にあったが、今後は学部FD委員のマネジメントの下、フェロー自身が企画してより積極的な指導を行うという体制に変えていきたいとも考えている（例えば答案執筆を練習する勉強会を開催する等）。